

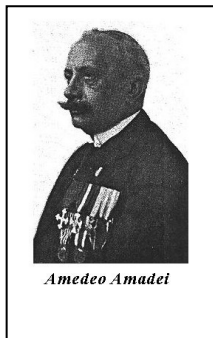
曲目解説

Suite medioevale

Amedeo Amadei (アメデオ・アマディ) 作曲

組曲「吟遊詩人」

中野 二郎 編曲



Amedeo Amadei

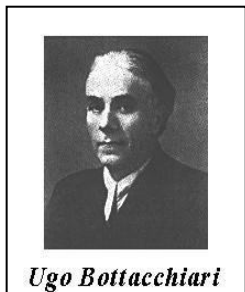
イタリアの著名な音楽一家に生まれたアメデオ・アマディは、祖父ピエトロ(1809- 1877) 父ロベルト(1840-1913)の三代目として1866年12月9日イタリアのロレートに生誕、1935年6月16日トリノに逝った作曲家で管弦楽指揮者である。父ロベルトに学びその後ローニアのアカデミア・フィラルモニカを卒業。オルガニスト兼合唱指揮者を務め40以上の作曲コンクールに入賞。1889年に歩兵第73連隊長を拝命以来、各地軍楽隊長を歴任して、退役後はトリノに安住し、指揮者、教授として音楽界各方面に尽くした。作品もオペレッタ、管弦楽曲、奏楽歌、ピアノ曲、室内楽曲、マンドリン合奏曲を含めて約500曲がある。

マンドリン合奏曲への創作は既に1897年頃から始められているが、1906年ミラノのイル・プレットロ主催の作曲コンクールに「プレクトラム賛歌」が受賞して以来、判明しているだけでも90曲以上ある。本曲(原曲は管弦楽)は、題目の表す通り、中世の吟遊詩人を歌ったロマン的な作品で、アマディの死後、娘のカルラから編曲者の中野二郎に贈られ、名曲「海の組曲」に匹敵すべき佳曲として我国のマンドリン合奏の重要なレパートリーになった。当初、3楽章と4楽章しか入手出来ず、4楽章を同志社大学マンドリンクラブ第87回定期演奏会(同志社創立100周年記念 1975年12月9日京都都会館第2ホール)の幕開けとして部分的に初演。その後1楽章2楽章が見つかり、同志社大学マンドリンクラブ第90回定期演奏会(1977年5月30日 大阪青少年会館)で全楽章が初演された。

Il Voto (イル・ボート)

Ugo Bottacchiari (ウーゴ・ボッタキアリ) 作曲

詩的幻想曲「誓い」



Ugo Bottacchiari

ウーゴ・ボッタキアリは1879年、現在のイタリア中部カステルライモンドに生まれたオペラの作曲家である。幼少より音楽的才能を発揮し、18歳の時デビュー作「行進曲“カステルライモンド”」で賞を得た後、ピザロに赴きロッシェニ音楽学校でピエトロ・マスカーニの教えを受け管弦楽、室内楽、声楽等多くの分野で作品を残した。マンドリン曲においても「交響的前奏曲」「詩的セレナータ“夢！うつつ！”」など多くの作品を発表し1944年死去。本曲は1910年10月のIl Plettro誌主催の作曲コンクールでS.ファルボの「田園写景」L.メルラナーフォークトの「過去への尊敬」と並んで1等に推された作品である。ベルガモのドニゼッティ劇場に於いてエウチュディティの率いる「エストウディアンティナ・ベルガマスカ」によって初演。編成はマンドリンが3パート、マンドラ・テノールが2パートに分かれマンドローネを含めて計10パートで構成され、代表作として広く演奏されている「交響的前奏曲」と同様、和声の美しさをいかんなく発揮している。マンドローネの重々しいソロに始まり、次にそのテーマがマンドロンチェロ、マンドラ・テノール2nd、マンドラ・テノール1stと順にマンドリン1stまで受け継がれ、見事な重なりをみせて展開している。「Il Voto」というタイトルの邦訳については色々な訳がある。“Voto”の意味として、誓い、誓約、供物捧げ物、願い(祈りにも似た)などある。そして本曲の由来としては、アダムとイヴの昔からの人間の宿命である恋愛の葛藤を描き、喜び、悲しみ、戸惑い、ためらい…とその経過を息苦しいまでに描写したもの、又は

「神聖なる誓い」というよりも、世俗的でセンチメンタルな「願い」。いやもっと生々しい、「愛欲の世界」を描いたものなど様々である。唐突な高まり、底からわき出るように上昇していく音形は、エクスタシーそのものを描いていると取れなくもない。ポツキアリはこうした衝動的な音楽を書く事にかけては本能的な天才であった。

Epicidio Eroice

Carlo Otello Ratta (カルロ・オテロ・ラッタ) 作曲

「英雄葬送曲」

作者は 1888 年 9 月 24 日イタリアのフェルラーラに生まれ、1945 年 10 月 30 日同地に逝いた作曲家でピアニストである。作品には 1935 年 10 月 20 日にコモ劇場で初演された 1 幕のオペラ「Marfisa」2 幕のオペレッタ「A Mosca Cieca」などがある。イタリアのシエナでは 1940 年、1941 年の 2 回に亘りマンドリンオーケストラのためのオリジナル作品作曲コンクールが行われた。本曲は 1941 年の第 2 回作曲コンクールにおいて 2 位入賞したものであるが、多くの優れた作品が入賞したにもかかわらず第二次世界大戦のイタリアの敗戦とともに、イタリアマンドリン界も大打撃を受け、復興するに至らずに数々の名曲も出版されず眠ってしまったままになっていた。1974 年渡伊した同志社大学マンドリンクラブOB指揮者の岡村氏によって、この曲を保持していたシエナのアルベルト・ボッチ氏より譲り受け 1975 年 8 月 1 日の同志社大学創立 100 周年記念の名古屋演奏会(名古屋市民会館中ホール)で初演された。以来我国のマンドリン界で名曲中の名曲に数えられるようになり、各地の団体で頻りに演奏されている。「英雄葬送曲」の“英雄”とは、特定の個人をうたったものではなく、第二次世界大戦中、ドイツ、イタリア軍の重要な拠点、リビアのトリポリ陥落に寄せたものであり、連合軍との間での激しい攻防で、その勇敢なる戦士達を讃えた悲壮な挽歌である。曲は 4/4 拍子、Maestoso、二短調の劇的な強奏で始まる。やがて第 1 マンドリンによって哀しく歌われる Andante mosso con dolore の部分に入り、曲は超絶技巧的な旋律で緊張と弛緩を繰り返し、次第に高まっていく。そしてその高まりが頂点に達した瞬間、冒頭部が再現され、やがて静まり前半部が終わる。後半部は 4/4 拍子、Andante Cantabile 二長調で、英雄の過去を回想するかの様なやすらぎに満ちた美しい旋律に始まり、曲は徐々に高潮し Solenne の哀しい凱歌へと進む。そして圧倒的な興奮の中で聴く者の魂を揺さぶるかの様に、劇的に幕を閉じる。まさに名曲にふさわしいフィナーレである。

Suite Casse-Noisette

Peter Ilyich Tchaikovsky (ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー) 作曲

組曲「胡桃割り人形」

小穴 雄一 編曲

チャイコフスキー (1840 年~1893 年) は、バレエ音楽や 6 つの交響曲、ピアノやヴァイオリン協奏曲など数々の名曲を作曲したあまりにも有名なロシアの作曲家である。その音楽は、叙情的で流麗、メランコリックな旋律美がその第一の特徴であるといえるが、同時に、構成面やオーケストレーションでも際立った才能を示しており、音楽史における巨人のひとりと言って差し支えないであろう。さて、バレエ音楽「胡桃割り人形」は、彼のいわゆる 3 大バレエ音楽の最後の作品であり、死の前年の 1892 年に作曲された。この作品はドイツの作家ホフマンの「胡桃割り人形とねずみの王様」という童話を劇作家デュマがフランス語に翻案したものを元に振付師・演出家プティバが二幕形式の台本を書き、その台本を見ながらチャイコフスキーが曲を付けたものである。

【あらすじ】

第一幕・・・クリスマス・イヴの夜。幕が開くとそこは、美しくクリスマスの飾り付けをされた居間。次々と招待客がやってくる。そこへ人形使いのドロツセルマイヤーが現れ、子供達に人形劇や手品を見せ、子供達を驚かす。もっと見た

いとせがむ少女クララにドロッセルマイヤーは醜い胡桃割り人形をプレゼントする。やがてパーティーは終わり、夜も更けた頃、置き忘れた胡桃割り人形を取りにクララが居間へやってくると、ちょうど時計が12時の鐘を打つ。鐘が鳴り終わると不思議なことにクリスマスツリーが巨大なツリーになり、ねずみの大軍が押し寄せてきた。ねずみ軍と戦うおもちの兵隊達と胡桃割り人形。大好きな胡桃割り人形を助けるためにクララは、ねずみの王様に向かってスリッパを投げつける。そのおかげで戦いは終わり、ねずみ軍は敗退。倒れていた胡桃割り人形が顔を上げると、なんと美しい王子様へと変わっていた。2人は手に手をとって雪の精が舞う中を、おとぎの国へと向かって行く。

第二幕・・・舞台はお菓子の国。到着した2人を金平糖の精が出迎える。2人を歓迎する様々な踊りが踊られる。スペイン（チョコレート）、アラビア（コーヒー）、中国（お茶）、ロシア、葦笛、ジゴニーヌおばさんとポリシネルたち、花のワルツ、金平糖の精と王子のグラン・パ・ド・ドゥ（男女二人が踊る踊り）。踊りが終わると、そこはもとの居間だった。クララはそこで眠り込んでいたのだ。目が覚めるとそこにはドロッセルマイヤーからもらった醜い胡桃割り人形が。夢を見ていたのだ。クララは今まで見ていた冒険と美しいおとぎの国の世界を胸に、胡桃割り人形を抱きしめる。

組曲「胡桃割り人形」は、このバレエ音楽の中から、チャイコフスキー自身が8曲を抜き出して演奏会用組曲とした。いずれの曲も、美しく親しみやすいメロディーと特徴的で変化に富むリズムを持ち、数あるクラシック曲の中でもっともポピュラーな人気を得ている作品のひとつであるといえよう。とくに、映画ファンには、ディズニーの不朽の名作「ファンタジア」における極めて美しく印象的なアニメーションを思い出される方も多いであろう。曲に関連した登場人物を一切使わず、妖精や花、金魚たちが踊る生きものたちのバレエとして描いたこの映画は、製作後65年を経た現在でも、映像と音楽の融合の、もっとも成功した一例としてゆるぎない地位を保っている。

1. 小序曲 (Overture Miniature) Allegro giusto 変ロ長調、4分の2拍子(複合2部形式)

小さく、ささやくような歌いだしから、徐々に音量が増しドラマチックな展開をみせる。全体に軽快かつ美しい曲であるが、マンドリンアンサンブルでの演奏の難易度はかなり高い。

2. 特徴ある舞曲 (Danses caracteristiques)

(1) 行進曲(Marche) Tempo di marcia viva ト長調 4分の4拍子(ロンド形式)

第一幕で子供たちが部屋に入ってくる時の、かわいくて優美な行進曲。無邪気な快活な主題が印象的である。胡桃割り人形といえば、まずこの曲を思い浮かべる方も多いであろう。

(2) 金平糖の踊り(Danse de la Fee Dragee) Allegro non troppo ホ短調 4分の2拍子(複合三部形式)

お菓子の国の、王子とクララを歓迎する大宴会で、金平糖の精が冷たい鋭角的な光を反射させながら踊る音楽。原曲はチェレスタが秀逸な使用例として知られるが、今回はマンドリンの楽器特性を十二分に生かした編曲でお楽しみいただけるものと思う。

(3) トレパック (Danse russe Trepak) Tempo di Trepak, Molto vivace ト長調 4分の2拍子(複合三部形式)

ロシアの農民の踊る2拍子の激しい踊り。夢の中のお城で、チョコレートの精がこの曲に合わせて激しくコサックの踊りを披露するシーンの音楽である。爆発的にクライマックスへと向かう活気に満ちた曲で、終わりに近づくにつれてテンポがどんどん速くなっていく。

(4) アラビアの踊り (Danse Arabe) Allegretto ト短調 8分の3拍子(変奏形式)

コーヒーの精の踊り。全体的に甘い東洋的な旋律の中で、アラビア風のゆったりとした柔らかい踊りが披露される。旋律を縫うように入ってくる打楽器の弱い響きにより、不安げで不気味な雰囲気醸し出される。

(5)中国の踊り (Danse Chinoise)

Allegro Moderato 変ロ長調 4分の4拍子(小三部形式)

お茶の精の踊り。規則的なややおどけたような刻みで始まる。その単純なリズムの中を、ソロマンドリンが高い音で自由にかけめぐる。

(6)葦笛(あしぶえ)の踊り (Danse des Milritons)

Moderato Assai 二長調 4分の2拍子(ロンド形式)

おもちゃの3本の笛「ミルリトン」が、軽やかなボルカのリズムにのって踊る。低いピッチカートのリズムの上に跳ね回るような軽やかな旋律が、3パートに分かれたギターによって奏される。その後、マンドラが急ぎ足で華やかに行進曲風を感じを出し、再び3パートのギターで最初の主題が奏でられる。効果的なギターの活用はまさに編曲の常識を打ち破ったと言ってもいいだろう。

3. 花のワルツ (Valse des fleurs)

Tempo di Valse 二長調 4分の3拍子(複合三部形式)

組曲の最後を飾るのにふさわしい華やかなワルツで、あらゆる花が舞い、おもちゃもお菓子も、みんな一緒に踊る。華やかな導入の後に、ピアノのソロが最初はややためらいながら、やがて花がいっぱいに開いていく印象を描き出していく。続くワルツは有名な旋律で、さらに続くウィーン風の旋律、情熱的な旋律ともどもマンドラが受け持つ。最後に全員が精いっぱい力で主題を引き継ぎ、劇的な結末を迎える。

編曲者紹介

小穴 雄一 (おあなゆういち) 1957年東京生まれ。慶応義塾高等学校入学後マンドリンを始める。マンドリンを竹内郁子女士に師事。指揮法と楽典基礎を久保田孝氏に師事。慶応義塾大学4年次に常任指揮者の服部正氏の副指揮者を務める。卒業後は会社勤めの傍らクリスタル・マンドリン・アンサンブルの客演指揮、アンサンブル・アメデオの指揮者兼編曲者、として精力的に活動。著書にドレミ楽譜出版社より「マンドリン教本」「マンドリンヒット曲集」がある。氏の編曲は常に独創的な発想から、ポピュラー、クラシックの広い分野でマンドリンに表現力の可能性を追求しており、それこそ「世界に一つしかない」オリジナル曲に仕上げている。今回、当アンサンブルの為に快く演奏の許可を頂きました事、誌面をお借りし、心よりお礼申し上げます。

当アンサンブルが過去に演奏した小穴氏の編曲作品

- 24 回定期 ロンドンデリーの歌
- 25 回定期 ウォルト・ディズニー・メドレー 星に願いを
- 28 回定期 フニクリフニクラ(デンツァ)
- 29 回定期 ホルベルクの時代より「前奏曲」(グリーグ) サウンド・オブ・ミュージック・メドレー(ロジャース)
- 31 回定期 アニーローリー マイフェアレディ序曲(レーヴェ) 34 回定期 小組曲(ドビュッシー)
- 35 回定期 シベリア狂詩曲(イワノフ)・「2つの悲しき旋律」より「春」(グリーグ)・カレリア組曲(シベリウス)
組曲「展覧会の絵」(全曲)(ムソルグスキー)・火の鳥より「終曲の舞」(ストラビンスキー)
- 36 回定期 華燭の祭典(マネンテ)・組曲「惑星」よりジュピター(ホルスト)

組曲「胡桃割り人形」 マンドリン合奏への編曲の試み

マンドリン奏者の青山忠氏の主宰するクリスタル・マンドリン・アンサンブルの為に編曲、第10回定期演奏会(1994年3月13日東京都武蔵野市民文化会館小ホール)で初演、大好評を得た。初演版(弦楽編成)には、その後ピアノ、打楽器等が加えられたが、今回は2003年改定版で演奏する。根底に流れる夢幻性あふれる流麗な旋律、軽妙なリズム、華麗な音色効果、そしてメランコリックな甘さが加わった原曲を、大胆な独創的な手法で仕上げた。ギターの効果的な活用とマンドリンのトレモロとピッキングは予想以上にマッチし、マンドリン合奏の新たな可能性を感じた。

第37回定期演奏会に寄せて 山口章太

福岡シンフォニック・マンドリン・アンサンブル(FME)に入り21年が経過した。演奏をする事は楽しい。その為には自分が少しでも成長していると言う事を実感したい。勿論FMEにも表現力を高める事に挑戦し続けて、団員全員が達成感や充実感を得て欲しいと思うが、その為にも選曲には十分な時間と労力をかけたい。FMEは31回定期より、本来追求している音楽性を前面に出す事に切り替え、選曲のジャンルをマンドリンオリジナル曲とクラシックの編曲作品に絞り込み、弦楽編成だけのマンドリン本来の透明感のある、遠達性の高い演奏に拘り続けて来た。33回定期、34回定期で技巧的にも難しいと言われる「第二小組曲」・「第三小組曲」(共にミケーリ作曲中野二郎編曲)35回定期でムソルグスキーのピアノ独奏曲「展覧会の絵」(全曲)を弦楽編成のみで演奏。関東・関西方面からも評価を頂くなど音楽的に充実したものを感じる。

近年、団員の増加で大音響と成って来たりもするが、大音響とは音楽的において人を興奮させはするけれど、感動はさせられない。本来の感動とは静けさの中の、ピアノシモの中にこそあるのではないか？
今回の組曲「胡桃割り人形」でも、随所にピアノシモが散りばめられており、最大限の集中力を払って、豊かな表現を行いたい。